

クライミングの 潮流についての考察

柳澤昭夫



1997 年(平成 9 年)

10 月号 (No.629)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目 次

クライミングの潮流について考察 1
DHAULAGIRI 通信・1 3
追悼・中澤眞二名誉会員を悼む 4
報告

科学委・夏山気象入門第 4 回 5
図書委・ヒラリー卿は語る 6
データバンク研・ホームページ試
行版誕生!! 6

支部だより
東海支部・チャルン峰初登頂 8
山形支部・栗駒山に行く 9
秋田支部・中岳・四角岳 9
岐阜支部・クラソ明神小集會 10
遠路大朝日岳へ 11
福岡支部・鬼ヶ城で追善の集い 12
宮崎支部・白鳥山・御池の山旅 12
海外の山・山先生たち 10
自然保護随想・ザオウカラマツ 13
東西南北

「冠松次郎と黒部溪谷」展 14
山研・ある日ある時 14
ヤルフン源流域踏査隊 97 だより 15
「サリーンさんを支援する会」 15
三角点の顔について 15
8 月号の巻頭原稿について 16
図書紹介 17
ルーム日誌・会員異動・書籍受入 18
INFORMATION 19

▶ 日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10~20 時
水・金曜日 13~20 時
▶ 図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13~20 時

■ 憧れより困難を求める時代

昭和三十年代末から四十年代にかけて、戦争による中断から立ち直った登山界は、いわゆるクラシックルートの冬季登攀からはじまって黒部の丸山東壁や奥鐘山西壁、唐沢岳幕岩などの大きな岩壁に、埋め込みボルトと人工登攀の技術が導入され、穂高や劔の岩場を超えたスケールの大きなルートが次々と初登攀された。ようやく本格的なクライミングの時代を迎えたといってもよいだろう。中心で活躍したのは社会人山岳会の先鋭的クライマーである。大岩壁の初登攀、冬季登攀の記録がつぎつぎと発表された。

エベレストが登頂されたとき、世界のクライマーはヒマラヤ鉄の時代の到来を予感し、八千メートル峰のピークハントから、より困難な峰やルートへと目を向け、歩く登山から

よじ登るクライミング主体の登山へと発展する。ヒマラヤの大岩壁を目指して、冬季登攀や継続登攀を実践する。

その昔、ヒマラヤ登山は憧れであっても、だれもが遠征できたわけではなく、多額の資金を要した。経済の高度成長期を経て、多勢の人が出かけるようになると、情報と経験が飛躍的に増加する。ヒマラヤの持つ高さの影響も次第に明らかにされ、高所へ適応するための方法論、ヒマラヤ登山の戦略、戦術、登山の運動生理学的条件などが、情報や経験の蓄積によって次第に明確になってきた。リッジウェイではないが「ちょっとエベレストまで」の時代を迎えたのである。

その一方で、世界の第一線を目指すクライマーは、アルプスやカフカズの大岩壁の登攀やハイレベルなフ

リークライミングで鍛え、ヒマラヤの大岩壁で極めて困難なクライミングを展開する時代に入った。

ジョン・ロスケリーが「私の登山の中で素晴らしかったのは、決して八千メートル峰ではなく、ガウリサンカールやウリ・ビアフォのクライミングであった」と述べているように、高さこそ八千メートルにとどかなくとも、氷河に削られたが故に鋭い岩峰や急峻な岩壁で構成された六〇七千メートル峰の困難な岩壁に挑戦する。ジャヌー北壁やローツェ南壁を単独で登攀したトモ・チェセンのとき、まさにスーパースターが出現した。

■自由な発想を生かす少数者の時代

ひるがえって、ヒマラヤの高峰を目指す日本人は多くなったが、一部を除いて困難なクライミングに挑戦する者は少ない。世界のクライマーとの力量の差がますます大きくなる。大学山岳部へ入部する者は少なくなり、山行日数はかつての半分以上に減少した。社会人山岳会も同様若い人が少なく、衰退傾向にある。クラブ単位で行われていたいわゆるオーソドックスな登山に代わって、多様な登山が展開されるようになった。しかし総じて、苦しい、厳しい登山は嫌われるようになったように思う。



ヒマラヤ登山、とくに八千メートル峰ともなれば、かつては大きなチームを組まなければ不可能だと信じられていた。しかし、メスナーの実践に見るように、少数者の速攻による登山が十分可能であり、登山本来の課題に取り組むクライマーの登場を見るようになった。何より個人の自由な発想による登山を重視するようになる。とくにクライミング技術やスピードを重要視するルートでは、優れた技術と経験の持ち主が、単独あるいはペアでチームを作るほうが効果的である場合が多い。高所を数多く経験することで、克服(適応)方法が明確になってきたこともその

上／負傷者の搬送訓練風景(負傷者を背負って岩場から下ろす訓練なども行っている) 中／五月の研修会より、劔岳カニの横ばいを行く 下／夏山前進基地でのデイスカッション風景(熱い議論が戦わされることも多い)



要因である。

個人の自由な発想と主体性を尊重する上で小さなチームが中心になると、大人数の組織(チーム)の持つ意味が薄れてきた。クラブが目標を立て、それに向けての訓練を必要としなくなってきた。クラブは単に個人の主体性を実現するための集合体となる。多様な登山に、統一的な教育訓練では対応できなくなる。同時に集団の力が必要な事故に対応する能力も低下する。よくいえば、クラブが個性的でルーズな集団として機能する。悪くいえば仲良しサロンになる。発展的で創造的な登山のためのベーシックな訓練や教育が欠落した



ところに、大学山岳部や社会人山岳会の衰退する要因がありはしないだろうか。

■研修会も時代の変化とともに

登山研修所の事情からいえば、研修会を支えたのは登山界をリードした昭和四十〜五十年代の社会人山岳会の先鋭的クライマーであった。それまでの山岳部(会)の中で体系化されてきた技術を一変させたといっても過言ではない。研修会ごとにそれぞれの主張や経験、技術論が白熱してぶつかり合い、人が集まることに何かが壊れ、何かが創り出されてゆく奔流のような情熱がふつふつと

DHAULAGIRI

通信・1

日本山岳会青年部
ダウラギリ I 峰登山隊1997

隊長・松原尚之

8月30日・ポカラ発

日本はお変わりありませんか？ 出発前は大変お世話になりました。ありがとうございます。

私たちはカトマンズでの準備を終え、昨8月29日、バスでポカラに移動しました。日程に若干の遅れがあるほかは、まず順調に進んでいます。隊員の体調

は、軽い下痢を患っている者が数人いますが、皆おおむね良好です。

ネパールは、私たちが着いた8月21日以降、22日ゼネスト、23日土曜休日、24日平日、25日祭日、26～28日平日、29日ストライキ——というように、ストライキと休日、祭日が次々と押し寄せるため、仕事の進行が遅れてしまいました。

日本からアナカンで送った荷物を引き取ることができたのは、ポカラへ移動する前日（8月27日）の午後といったあんばい。まあ、おかげで比較的のんびりと過ごすことができ、体調維持にはよかったかもしれません。

今日8月30日も、ネパール全土でストライキ——最近のネパールはストがやたらと多いのです。商店は閉まり、タクシーやほかの車も使えません。ジョムソムには明日早朝の飛行機で移動します。今日はストでカトマ

ンズからの移動ができないため、1日早めて昨日ポカラへ移ってきたというわけです。したがって今日はポカラでレストです。

明日31日は飛行機でジョムソムに移動後、マルファ村まで入ります。マルファへ陸路でくる我々のポーターと隊荷、ガイドを数日間待つことになります。予定では9月3日、マルファで隊荷とポーターと合流できることになっています。それまで、マルファでは登れる限りの高所順応をしたいと考えています。

マルファからダウラギリBCへのキャラバンは9月4日スタート。10日から12日までにBC入りし、登山を開始する予定です。

今年のダウラギリは、我々のほかはウクライナ隊とスペイン隊がノーマルルートに入るだけ、全部で3隊と少ないようです。

またご連絡します。

登山が創造的に発展するならば、山岳会（部）が矮小化し、衰退しても別にそれが重要な問題ではない。創造的な力は、根源的には組織やシステムがどうなってしまうのかという心配ではなく、結局人にかかわる問題である。理論や経験に基づく総合力は「人」に蓄積され、その「人」が登山を創造する。システムをどのようにいじっても新しいものが創り出されるわけではない、「人」が創りだすのだ。システムチックに機能する組織では、エキスパートやスペシャリストを育てるかもしれないが、真に創造的な人を育てられないので

■これからの登山を考える

たぎっていた。そうした熱い集まりが研修会を支え、内容を充実し、創造してきたと思う。混沌としたものが新たな展開を見、深化していった。かつて登山界をリードした昭和四十、五十年代のクライマーも、年を取った。講師間の年齢差が大きくなったこともあるが、すべてを賭けるようなクライミングが衰退するとともに、燃えるような情熱と激しいデイスカッションが研修会の中で影をひそめつつある。自分を極限まで追い込むようなトレーニングとクライミングを実践する者はほんの一握りになったのかもしれない。

これからの日本人の登山が世界に伍して創造的であるためには、そのベースも豊かでなければならぬ。大きな「器」の中に、人や機能、理論、知識、経験など、ベースとなるものが多様で豊富に蓄積されなければならない。貧弱なベースからは貧弱なものしか創造されないからである。巨大なベースとは何か、再検討してほしい課題である。

■登山活動を支える環境整備を

登山は、自然を相手に未知との遭遇を求め続けるスポーツであるが故に、予測されにくい危険を内包した

はないかと思う。今何よりも必要なことは、主体性を大切にする組織を再構築することだと思う。組織が目的を効率的に遂行するために機能すると、それはプロジェクトチームになる。必要な人と機能で構成され、それ以外のものを切って捨てる。そうなる目的達成のためには都合がよいが、目的を達成したとき組織は崩壊する。人にも組織にも、何も蓄積されたり継承されたりしない。仮に蓄積されたとしても、必要でないものを切って捨てた極めて貧しいものになる。多くの選抜チームや目的のために集まった同人集団、最近はやりの公募登山隊などにそれを見る。

冒険的なスポーツである。安全をいかに確保するかは常に重要な課題であり、創造的登山を支える重要なベースである。確保技術、危急に陥ったときの対処能力、雪崩対策など、危険に対処する能力を高めて、より攻撃的な登山を創り出すことができる。一見高いレベルでの登攀は、こうした防禦力を犠牲にして成立しているかのように思えるが、登山における戦略、戦術は、より防禦力を高めてこそ攻撃力を発揮することができる。真に冒険的であるためには、

より高いレベルな防禦力にかかっている。こうした防禦力を組織のベースに組み込むこと、個人の主体の中に取り入れること、そのために機能する組織であることが必要である。たとえそれがどのような小さな組織であっても。

体力、技術などを高めること、この問題の再検討なくして世界に追いつき追い越すことは不可能である。またこうした問題を個人レベルで検討し、構築していたのでは、個人レベルでの登山を創造することはできても、世界レベルには達しない。ほかのスポーツはスポーツ科学の成果を取り入れ、トレーニングや技術、体力を構築してきた。しかし、世界を追い抜くにはスポーツ科学の成果を集約するだけでなく、その上に立

って大胆な仮説を立て、それを実証しなければならぬ。失敗する可能性も高いが、少なくとも試行錯誤の末の進化が必要である。登山界においてはこうした情報を集約し、再構築する体制やブレイン組織が未成熟である。

さらに欲をいえば、ほかのスポーツが行っているように、高いレベルな登山活動を支える環境条件を整備すること。タレントの発掘とその教育、そのための資金の準備ができないものだろうか。登山界ではほかのスポーツに見られるような、真の意味でのナショナルチームさえ作られたことがない。かつて億を超える資金で運営された遠征隊もある。資金的には無理な話とは思えないので、検討に値する。これは高いレベルな一握りの人を対象にした話に思えるが、ハイトップを作る過程がまた、多くの豊かなベースを構築するのではないだろうか。情報の集約と還元いうなら登山界における双方向通信システムくらいはできないだろうかと思う。

世界を目指し、さらにそれを越える人は一人で生まれるものではない。大きな組織が実践集団として持つ意味は薄れた。多様で、主体的で、創造的な登山は、小さな実践チームにある。そうしたチームをゆるやかに

サポートするベース母体が、今求められているのではないだろうか。

(文部省登山研修所所長)

追悼 中澤眞二名誉会員を悼む



中村純二

会員番号六二三番、名誉会員でもあり、永年会員でもあった中澤眞二氏は八月二十七日、百五歳の高齢で亡くなられた。八月上旬肺炎のため入院されたが、八月二十五日ご本人の強い希望もあって自宅に戻られ、二十七日午前四時半、息を引きとられた由である。喪主は長男透氏。本会からは生花が捧げられ、二十八日のお通夜には松田雄一会員、三十日の田園調布教会における葬式には穴田雪江会員と中村が列席した。

中澤氏は明治二十三年山梨市のお生まれで、十二歳の時、日下部教会で洗礼を受けた熱心なクリスチャンであられた。小さい時から山登りが

好きで、旧制一高では日高信六郎元会長と、また東大電気工学科では別宮貞俊元会長と同級で、大正七年大学在学中に本会に入会されている(紹介者は梅沢親光氏、高野鷹蔵氏)。尾瀬にもよく出かけられ、武田久吉博士とも親しい間柄であった。

東京電力在動中は、発電所の建設に携わってこられたが、戦後になって、尾瀬の発電所計画が持ち上がる、自ら尾瀬の年間雨量を調べ、これでは発電量が小さく、貴重な尾瀬ヶ原を水没させてまで発電所を作るべきでないとの結論を得られた。その説明を商工省水力課で行ったことが決め手となって尾瀬は水没を免れた。この話は長年秘められていたが、昭和六十一年、ご本人が「山」四九二号に発表され、明らかになったものである。(「山」五五四号も参照)

その功績は大きく、一九九四年名誉会員に推薦されたが、年次晩餐会当日、百歳とは思えぬしっかりした足取りで登壇された姿は、今でも私どもの目に鮮やかである。晩年になってもお元気で、工夫発明やゴルフなどを楽しみ、八月に入ると、一か月後の百六歳の誕生日をご本人もご家族も、心待ちにしておられた由である。その目を目前に亡くなられたのは誠に残念である。衷心よりお悔み申し上げる次第である。

報告

REPORT
10月

科学委員会・連続講座

「夏山気象入門」第四回
暑い夏・涼しい夏

日本気象協会 清水輝和子

一、太平洋高気圧と猛暑

猛暑の夏は、太平洋高気圧が図1のように日本付近に強く張り出す。一方、冷夏では図2のように日本付近への張り出しが弱い。上空五キロ付近の天気図でも、暑夏は亜熱帯高気圧が日本付近を覆っているが(図3)、冷夏では南に後退している(図4)。さらに、上空一六キロ付近の一〇〇ヘクトパスカルの天気図では、ヒマラヤ上空で発達するチベット高気圧が、猛暑の夏は日本付近まで張り出して来るが、冷夏では張り出しが弱い。図に示した一九九四年の夏は、地上から上空までしっかりした三つの高気圧に覆われていたため猛暑となった。

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

二、偏西風の影響

偏西風(ジェット気流)の流れも夏の天候を左右する。ジェット気流は寒気と暖気の境界にある強風帯である。

猛暑だった九四年七月(図3)にはジェット気流が東北部にあったが、大冷夏の九三年(図4)は東日本から西日本まで南下していた。とくに、九三年は偏西風が大きく蛇行し、オホーツク海高気圧が居座り(プロッキング高気圧)、低気圧をプロックする現象が一月以上続いた。オホーツク海高気圧が持続すると、北日本から東日本の太平洋側に冷たい北東風(やませ)を吹かせ、大冷害を引き起こす。

三、エルニーニョとラニーニャ

太平洋の海面水温の状況も、夏の天候を決める重要な要因である。赤道太平洋の東部で高く、西部で低いエルニーニョ現象が発生すると、太平洋高気圧の位置が日本から遠ざか

り、冷夏になる。反対

に、東部で低く、西部で高いラニーニャになると、太平洋高気圧は日本付近を覆い、暑夏になる。

四、噴火と冷夏

火山噴火が夏の天候に影響を与えることもある。

亜硫酸ガスを噴出させ、噴煙が成層圏まで達する大規模な噴火が起こると、その後数年間は成層圏に亜硫酸ガスからできた硫酸の微粒子が漂い、太陽光線を遮るため、地球全体の気温が下がる。九三年はエルニーニョが発生した上、ピナツポ火山噴火の影響も加わり、大冷夏となった。

五、極渦の大崩壊と冷夏

さらに、北極付近の低気圧が五月に大きく崩れる極渦の大崩壊が起こると、冷夏になることが多い。極渦が崩れると寒気が中緯度に南下し、北極点付近に高気圧ができる。九三

図1 猛暑

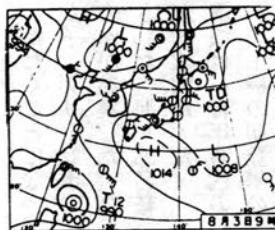
1994年8月3日
東京の最高気温39.1℃

図2 冷夏

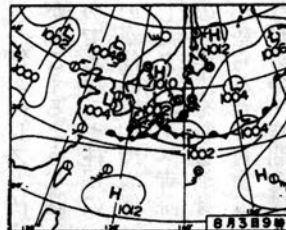
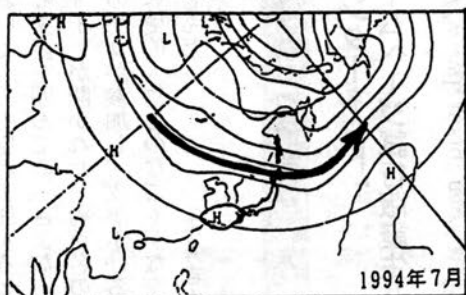
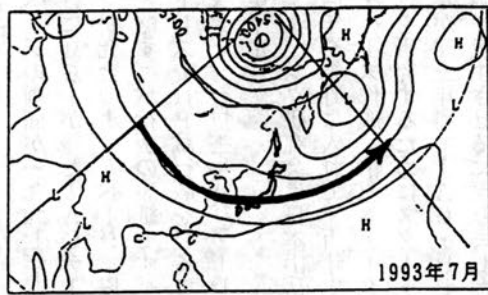
1993年8月3日
東京の最高気温20.2℃

図3 猛暑



500hpaの天気図 1994年7月

図4 冷夏



500hpaの天気図 1993年7月

年の五月は北極付近の高度が観測史上最も高く、極渦の大崩壊が起こっていた。

また、桜が早く開花した年は冷夏、あるいは猛暑といった極端な天候に

偏る傾向がある。春から高温が続いた場合、エルニーニョが発生すると冷夏になるが、発生しない年は高温が続き暑い夏になる。

六、さて、今年の夏は？

さて、今夏はどのような天候になるのだろうか。今春は記録的な高温だった上、エルニーニョ、五月の極渦の大崩壊が発生するなど、冷夏の要因がいくつかあげられる。五月の赤道太平洋の海面水温は西部で平年より〇・三度高く、六月上旬でも海水温が続いている。西部の水温低下が遅れているため、エルニーニョが発達して形を整えるにはまだ時間がかかり、今夏には間に合わない可能性が高くなってきた。

また、偏西風の流れもオホーツク海高気圧が持続するパターンは現れないようだ。六月下旬の時点では、今夏は暑い時期もあるが、不安定な天候もあり、盛夏と冷夏が交互にやってくることも考えられる。とすれば、天気予報で前線や寒気が南下すると予想している時期の登山は避け暑くなると予想する時期を狙って山行を計画するのがよいだろう。

七、冷夏の年の狙いの山は？

なお、冷夏の年でも高山は安定した天候に恵まれることもある。例えば、一九九一年八月は、地上付近の高気圧が北に偏り、東日本の太平洋

側は涼しく雲が多かった。

その一方で、上空の高気圧は強く、富士山の最高気温は一五～一六度Cと例年より五～六度Cも高かった。下層が低温で上層が高温となったため、大気成層は安定し、午後も雷雨や雷雨の心配がない、絶好の夏山登山日和が二週間ほど続いた。冷夏の年は、富士山の気温に注目するとよい。

また、冷夏ではオホーツク海高気圧が現れることが多いが、そのような年は、日本海側では北東風が山を越えて下降流となるため天気がよい。秋田や山形、越後、北陸などの山では好天に恵まれる。

気象学を味方すれば、冷夏でもがっかりすることはないということがお分かりいただけると思う。

*六月十二日実施、出席者十六名。

図書委員会・山岳史懇談会

初登頂／ヒラリー卿は語る

HAT-J主催の「青少年尾瀬国際フォーラム」に出席のため、エドモンド・ヒラリー卿が久方ぶりに来日した。フォーラムの諸行事を終えて離日する前夜の八月二十七日、JAC図書委員会の年中行事である山岳史懇談会を兼ねて、ヒラリー卿に



300人の聴衆を前に講演するヒラリー氏

公開講演をしていただくことになった。会場は昭和女子大グリーンホール、約三百名の方々が参集した。高年齢をおして出席された吉沢一郎名誉・永年会員の姿が印象的だった。

ヒラリー卿の講演は、青年時代のマウント・クック南山稜の初登攀の思い出から始まり、舞台はヒマラヤに移って、一九五三年エベレスト初登頂の息づかいが聞こえるような話が展開され、ついでヒマラヤ住民の環境改善のための奉仕活動、環境保全の努力、焼失したタンポチエ寺院の再建など、卿の後半生を彩る献身的な事業の数々が語られた。貴重なスライドを映しながらの一時間の講

演に、聴衆は息をのみ、ときに笑いを誘われながら、世界最高峰初登頂者の聲に接するという、至福の機会を堪能した。

講演のあと昭和女子大プレリウドにおいて、日山協が主催するヒラリー卿夫妻を囲むでの「さよならパーティー」が開かれた。約百名の山好きの男女が参加し、夜がふけるまで世界史的人物とのなごやかな交歓を楽しんだ。(平井吉夫)

データバンク研究会

「インターネット」ホームページ試行版誕生!!

<http://www.nisig.net/hmkami>

次ページの画面が一九九七年七月十二日に立ち上がったJACデータバンク研究会のホームページ(以下HPと略す)試行版の表紙です。このアドレスでHP試行版を見ることが出来ます。(将来正式なアドレスに変更予定)

データバンク研究会は日本山岳会の百周年を視野に入れて、百年史のデータベース作成、情報のデータベース化を研究するためにスタートしましたが、三年目でJAC・HPの試作版を誕生させるに至りました。

●ようこそ！JACデータバンク研究会の ホームページ (試行版) へ●

あなたは 000777 番目の訪問者です。

はじめに

- このホームページはJAC Data Bank研究会有志が試みに作ったJAC (日本山岳会) データバンク研究会 ホームページです。
- 内容の更新や追加は毎月一度をめぐりにして行く予定です。

● English Home Page (under Construction)

- 日本山岳会の歩み
- 日本山岳会の入会について
- お知らせ update 97/08/31
- 会報 update 97/08/31
- JAC資料の紹介
- リンク集
- 会員ページ
- ヒマラヤニュース update 97/08/21
- ダクラザリ1峰登山隊トピックス update 97/08/31



奥峰高 (撮影: 遠山元信)

このホームページに関してのご意見、ご感想、情報等があれば次の所までメール下さい。

65249472@people.or.jp 97/08/31更新

私はデータバンク研究会のメンバーとして、パソコン通信のフォーラムに会報の「INFORMATIO」を掲載してきました。HP作成に伴ってインターネットに接続する必要に迫られ、苦勞してやっとインターネットにアクセスすることができたばかりです。

インターネットもパソコン端末を操作できる環境がないと経験できませんし、インターネットについては世代間の認識ギャップが大きいことも事実です。日本山岳会として、このメディアの活用を計るための論議はどんな進展をするのだろうか、と考えるを得ません。海外でも各国の山岳会はすでにHPを開設しており、国内でも個人、団体、企業の各レベルで、山関係のHPはふえ続けています。

日本の山岳界を代表する日本山岳

会が、インターネットに情報受発信の窓口として、HPを設置することは必須の成り行きであると思います。JACのHPは上記のような案内のみならず、会員内の情報提供、会員外への情報提供など、その記載内容をどうするかについては、今後多くの議論が必要でしょう。

このHP試行版の誕生を機に、いろいろな立場からの議論が前向きなエネルギーとなって、日本山岳会のさらなる発展に結びつく可能性を秘めているような気がします。JACのもつ貴重な情報のデータベース検討の過程で生まれたHPの芽が立派に成長することを念じつつ、報告いたします。

(松尾良久)

* The mail ID of JAC members
JAC会員で電子メールIDをお持ちの方は、IDをJAC事務局、または「QFH01627@niftyserve.or.jp」多田真弘宛にご連絡ください。

HPでのニュース配信のほか、サイドインフォーメーションなど連絡に役立てたいと思います。

■会報編集委員会 九月十日の理事会において、HPの開設はとりあえず国内会員サービスとして承認されました。データバンク研究会のHP試行版に、会報「山」から記事を転載することがあります。ご了承ください。

柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉 弘編

全10巻／新装復刊

日本登山大系

◆バリエーション・ルート・ガイドの集大成◆

◆利尻山から屋久島まで主要山岳の岩場・沢・冬期尾根ルート約4000を完全収録◆

◆豊富なルート図・概念図と詳細な解説◆

◆全国百数十に及ぶ精鋭山岳会、山岳部による執筆◆

岩崎元郎著 ●1700円

沢登りの本〈新装版〉



白水社

〒101千代田区神田小川町3-24 ☎03(3281)7811 ●価格は税抜き

全巻内容

- ①北海道・東北の山 4700円
- ②南会津・越後の山 4700円
- ③谷川岳 4300円
- ④東京近郊の山 4200円
- ⑤剣岳・黒部・立山 4400円
- ⑥後立山・明星山・海谷・戸隠 4400円
- ⑦槍ヶ岳・穂高岳 4200円
- ⑧八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス 4400円
- ⑨南アルプス 4500円
- ⑩関西・中国・四国・九州の山 5200円

各A5判／平均320頁 (セット45,000円)

東海支部

チャルン峰初登頂

―第五次中高年高所登山隊

東海支部が派遣した「日本山岳会東海支部インドヒマラヤ登山調査隊一九九七」がインド北部のラダック南東部の未踏峰に登頂した。

チャルン峰が位置するツオモリリ湖周辺は一九九五年に登山が解禁された地域である。乾燥地帯に属し雪線は高く、峰々は氷冠をいただいてそびえている。

六月二十四日、空路、レーに着いた先発隊二名は、旧知のマナリの高所ポーター二名と合流。二十八日、ジープにてインダス川の上流スモド村に到着。まず西面を偵察後、転進して北面のリビル川をさかのぼり、

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。



中央がチャルン峰 (6546m)

五三〇〇メートル地点に偵察キャンプを設営。ルートを確定、七月五日にスモド村に到着した本隊を迎えた。ヤク、ポニーを使って七月七日に四八〇〇メートル地点にBC設営。七月九日に五三〇〇メートルにC1。七月十日には北面氷河末端五八〇〇メートルのモレーンにC2設営。翌七月十一日、水野起巳登山隊長(四六)、丸山剛(三九)、中世古直子(五九)、菊地啓一(四九)と連絡官、高所ポーター三名が、北西稜の岩稜に二〇〇メートルのフィックスロープを張り、六時間二十分かけて初登頂した。

「もうい岩稜を抜け、五〇メートル

ほどの雪壁を登りきると、雪におおわれたチャルン峰の頂上だった。

東には、赤茶けた荒涼たる山々が、はるかチベットまで果てしなく続き、南は、スピティの未踏の無名峰群。西には、神秘の湖ツオモリリ湖の背後に、メントック峰とサラ・シュワ峰を結ぶ氷雪の稜線が屏風のように連なっている。北側はリビル川の谷間から、未だ禁断の地、インダス川北側に、チャクラー峰がひととき高くそびえている。周りの山々を見下ろし、主峰に初登頂できた感動を味わった」と水野隊長が語ってくれた。

先発隊として、北面のリビル川

目で初登頂した速攻登山の感慨も含めての言葉であった。

十三日には、玉越弘志(五〇)、今田英司(四九)と高所ポーター一名、十五日には、鈴木常夫総隊長(六二)、田中太門(六四)、小島清子(六三)、渡辺くみ(六一)と高所ポーター二名、低所ポーター二名が登頂した。

チャルン峰を知ったのは、一九九五年夏、この地域の登山が解禁されたのと同時に、サラ・シュワ峰に初登頂した足利工業大学隊の沖允人隊長からいただいた写真からである。ピラミダルな山容で、一目見て気に入った。

しかし、この山に関する情報は極端に少なく、水場の問題とも関連してなかなか登山ルートの決定ができず、先発隊を本隊の一週間前に出すことにした。そして、一九九四年より二度実施している、この地域の環境調査も併せて行うこととした。

隊員は、冬山経験者を条件に支部報にて公募したところ、六十歳代四名、五十歳代四名、四十歳代三名、三十歳代一名の計十二名、山歴もさまざま、まさに現在のわが国の登山者構成を思わせる登山隊となった。総隊長を務めた鈴木は、常々、中高年登山者の発想からはアルピニズムの発展はないと述べ、割り切って中高年高所登山は楽しく、かつ全員登頂可能なタクティクスを採用している。

今回も、三五〇〇〜四五〇〇メートルの高所順応に十分時間をかけ、高所ポーター三名、低所ポーター二名を雇用し、隊員の体力の消耗を避け、高所での宿泊日数を極力減らしている。

東海支部における中高年高所登山は、一九八八年のヤン峰に始まり、九〇年ガングスタン峰、九三年メンソーサ峰、九五年ストックカンリ峰と、インドヒマラヤの六〇〇〇メートル峰を舞台に展開してきた。五十歳以上に限っても延べ二十三名(う

ち女性七名)が登頂している。

この数は見方によっては、個人の趣味の結果ともいえるが、若い支部員の中にアルピニズムへの理解者が存在することにもつながり、支部活動の刺激剤になっていると考えている。

(長坂 博)

山形支部

栗駒山に行く

七月六日、梅雨の最中、前線が東北地方に停滞し、前夜半から早朝にかけて大雨になった。車のラジオから県内各地で洪水も出ているとニュースが流れていた。庄内地区も同様の大雨で、同行予定の会員から合流参加できないとの連絡があり、前回の行事同様また中止になるのではと不安の中にも、定刻六時に内陸のメンバー八名が県庁前に集合した。

雨の中二台の車に分乗し、悪天候の場合は世界各地の湿原だけでもと考へ、高速山形道を経て東北道を北に向かう。

宮城県側に入ると天候も次第によくなり、栗駒ダム付近から雲が切れ東栗駒の山並みが見えはじめてきた。これなら大丈夫登れる。

栗駒山は、宮城、岩手、秋田三県にまたがり、山頂は外輪の一角でコニーデ型の休火山である。登山コー

スも様々あるが、今回は、天候のこともあり、イワカガミ平の駐車場からの中央コースを登った。

九時四十五分、戸惑いを感じるほどよく整備された登山道を登り始める。雨が時折横風と一緒に通り過ぎると、今までガスで見えなかった緑一面の山容が広角レンズを通したように飛び込んできた。山頂付近には、雪が残っていたが、山名の由来になっている駒の形の雪渓はもう見られなかった。

ウラジロヨウラク、サラサドウダ、マルバシモツケの花々が山道を彩り、疲れを癒してくれる。山頂付近の斜面を白く覆うコバイケイソウ



頂上は霧で展望はさかなかったが……

が雨に洗われた新緑とコントラストを作り実に見事だ。

十一時過ぎ山頂到着。秋田県側はガスで展望はさかないが、次第によくなってきたのは宮城県側だ。

頂上の広場は、須川温泉コースから登ってきたという中高年の登山者で一杯だった。中央に祭られている祠に無事を感謝し参拝。大きな標柱の前で記念撮影をし、少々早めの昼食を済ませ下山する。

下にしたがって天候はよくなり、美しい風景を満喫して約一時間でイワカガミ平の駐車場に戻る。

時間も早く期待の世界谷地へ回ったが第一、第二谷地とも、すでに花は終わり、わずかに残るニッコウキスゲと、木道の陰に咲いているサワラン、キンコウカなどで、振り返ると、栗駒山はよく晴れてきた夏空に頂上まで姿を見せていた。

(長岡 五百子)

秋田支部

春の山行は中岳・四角岳

六月二十二日六時、自家用車に分乗した一行二十一名は、国道七号線から二八五号線、一〇三号線を経て大湯温泉に着く。ここから不老倉林道を一キロほど走り、かつて鉾山の跡地であり、整地されて今は広い

草原となっている地点に駐車。堰堤二つに挟まれたこの草原からコンクリートの堤を越えるとすぐ登山口がある。

青森と秋田の県境となっている不老倉峠までは、道幅も広く緩やかな登りだが、荒れていて、このままでは廃道になるのではないかと心配だ。峠に着くと、青森県側から整備された道があり、中岳山頂までは迷うことがない。しかしタケノコ採りの残骸、大量のゴミにはあきれはて、全員閉口してしまう。山頂直下は藪こぎを覚悟していたが、きれいに刈られていた。

正午を前後に続々と山頂に到着。

ヒマラヤが身近になりました。チャーター便運行決定/

- ◆11月7日(金)~11月15日(土) 関空発着 JAZジャパンエアチャーター(カトマンスまで直行便)
- ◆11月14日(金)~11月22日(土) 関空発着 JAZジャパンエアチャーター(カトマンスまで直行便)
- ◆12月27日(土)~1月4日(日) 名古屋発着 SZ中国西南航空チャーター(ヒマラヤ越え)
- アンナプルナ方面~エベレスト方面、ヒマラヤンハイキングまで全6コース。
- 詳細カタログをご請求下さい。………ネパール説明会も実施中。

[世界の山旅・辺境の旅 秋~春版総合カタログ]完成しました。ご請求下さい。

運輸大臣登録一般旅行業第490号/日本旅行業協会正会員
アルパインサービス株式会社

〒105 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

一〇二四メートルのピラミッド型の山頂には一等三角点があり、眺望がよく、四角岳山頂が広々とした草原のように見える。

昼食後、四角岳に登ることにするが、秋田県側には登山道はなく、希望者十一名でアタック。背丈が三メートル近くの竹藪が続き、三十分ほど藪を味わいながら、一〇〇三メートルの山頂に到着。山頂の北側下方には草原があり、小さな池塘があった。中岳が三角形に見える。すぐ上に青森県側からの新しい登山道があった。藪ごぎの四角岳は下山も楽ではなかった。途中、雨が降り出し全身びしょ濡れになって下りた。

帰路は上小阿仁村「道の駅」で解散、秋田市着は二十時三十分であった。(鎌田倫夫)

*青森、岩手、秋田の三県にまたがるこの山へ、三支部による集中登山を提案したが、連絡がとれず、当支部が単独で実施。(事務局・佐々木)

岐阜支部

クラソ明神春季小集会

六月十五日、奥美濃の藪山、クラソ明神(一〇二三メートル)へ二十二人が登った。

美山町役場に八時集合。今日は誰に会えるかなとワクワクした気持ち

海外の山

山先生たち

江本嘉伸

九月二十八日の日曜日はウランバートルにいた。郊外の、トーラという川に面した林の中で、モンゴルの友人たちとささやかなピクニックをした。

はらはら、ふりかかっていた黄ばんだ葉が、突然、グオーツ、という強風とともにさながら「豪雨」のように降り注いだのに驚いた。

遠くモンゴルから、ひそかに元気だった山の先生たちをしのぶしかなかったが、この日同じ時刻「97スキルブルム峰お別れの会」が、神奈川県鎌倉女子大学で催されていた。

広島三朗を隊長とする「スキルブルム峰神奈川ヒマラヤ登山隊」は、登山隊のメンバー十六人中十二人までが高校教師という「山先生たち」の隊だった。

八月十七日、隊長以下八名が七三

六〇メートルの頂上に立ち、十九日にベースキャンプに集結、下山を待つばかりだった。その日の深夜、正確には二十日午前一時十五分、突然の爆風雪崩がキャンプを襲った。広島はじめ六人が爆風に飛ばされて死んだ。

「お別れの会」には千六百人もの人々が集まり、パキスタンの山から帰らなかった六人の魂に献花した。教員、または顧問教師の不在のための「廃部」が相次いでいるのが東京や他県の実情なのだ。

神奈川県の百九十の高校のうち百二十校に山岳部がある。これは、他の都道府県に比べ、抜群に多い。部員、または顧問教師の不在のための「廃部」が相次いでいるのが東京や他県の実情なのだ。

神奈川県の百九十の高校のうち百二十校に山岳部がある。これは、他の都道府県に比べ、抜群に多い。部員、または顧問教師の不在のための「廃部」が相次いでいるのが東京や他県の実情なのだ。

神奈川県の百九十の高校のうち百二十校に山岳部がある。これは、他の都道府県に比べ、抜群に多い。部員、または顧問教師の不在のための「廃部」が相次いでいるのが東京や他県の実情なのだ。

人生について最も悩み、喜びを知るのであろう多感な高校時代に、身近に山好きな教師がいるとしたら、素晴らしいであろう。たとえ、自身は

山に登らなくとも、大自然のありようを教師の口や写真から知ることにより、生徒たちの想像力、ものの考え方は、一冊の教科書を読むこと以上に大きな影響を受けることもあるだろう。

無論、否定的な見方もある。「長い夏休みを使って、好きな山に行く」教師への、教師仲間うち「やっかみ」もそのひとつだ。今回のスキルブルム隊が「神奈川県教育委員会」の後援のもとに実行されたことは、だから英断であった、と筆者は見直した。遭難の可能性が少しでもあるような活動には、事なかれ主義のお役所は普通積極的にかかわろうとはしないものだ。

コンピュータ使用年齢がどんどん下がっている現実の中で、子供たちと自然との距離は遠くなるばかりだ。先生たちでさえ試験に強い英才型がふえ、本当の自然に身をおいだ経験を持つ者は激減している。そんな時代だからこそ自然を愛する山先生たちの役割が重要なのだ。

今回の遭難が自然派教師への風当たりが強まるきっかけになってはならない、という趣旨の記事を筆者は新聞に書いた。日本山岳会の皆さんにも、一度山先生たちの役割を是非考えていただきたい、と思う。

で運転していった。身支度を整えた仲間を見つけ、顔がほころぶ。車から降りると「久しぶりやねえ」と声をかけられる。なんと嬉しいことか。総勢三十二人が七台の車に分乗して、登山口の白岩へ向けて出発した。白岩にはかつて人が住み、生活していた跡がところどころに見られ、何とも忍びがたい。苔むした石垣跡や崩れ落ちた家が点在していた。しかし神社だけは今もなお参拝されているのだらう、こざっぱりしていた。ここに住めますか、と問われたら、便利さに慣れた今では到底無理だろう。そんなことを考えているうちに林道の終点に着いた。



藪こぎに心地よい汗を流したクラソ明神行

いよいよ出発、藪をかきわけて登りはじめる。すぐ谷を横切って左岸に渡り、檜の植林道をジグザグに登る。コアジサイが咲いている。コブの手前の開けた西面から舟伏山が一望でき、一本立てて汗を拭く。コブを越えた後は、下から体を支えられて見上げなければならないほどの急登だったが藪も少なく、クマザサにつかまりながら一気に高度を上げ、雑木林に出る。新緑が美しく、疲れもいっぺんに吹き飛んだ。

ここからが美濃自慢の藪こぎである。手でかきわけ、頭を突っ込み、一歩登る。これを繰り返してしゃにむに進む。汗ビッシヨリになって全員無事に山頂に立った。

頂上からはサンノウの高が格好よくそびえていた。三角点をなで、早田道治リーダーの音頭で元気に「クラソ明神万歳」を三唱し、ビールで乾杯、昼食にした。

四方山話を楽しんでいるうちに一時間以上も過ぎてしまい、急いで下山にかかる。十五時、登り口の白岩へ帰着、散会した。

梅雨特有のどんよりした曇り空であったが降られずに登れたことが何よりであった。あまり登ることがない山だが、地図を読み、ルートを探しながら藪をこぎ、心地よい汗を流して、皆満足気であった。(藤田純江)

遠路大朝日岳へ

日本狭しといえど、さすがに岐阜から山形への車の旅はその遠さを実感させられる。日本海回り「夜討ち朝駆け」とはまさしくこのことか。

七月十七夜から十八日、山形鉄道荒砥駅でメンバーの一人と合流するのに、約七〇〇キロの道程をひた走り、最初の白鷹山(虚空蔵山)に立つ。

時間が早いので大朝日岳連峰の一角、頭殿山(地元の人にはトウドンザンと呼んでいた)へ黒鴨林道を利用して登った。あまり期待していなかったこの山も、登ってみると意外によい展望に大満足。ついでにと、その帰り大禿森山の三角点を大搜索、四等点発見に奥美濃の藪こぎを連想する思いであった。

翌十九日、梅雨明けの雲一つない絶好の登山日和に恵まれ、混雑する朝日鉱泉登山口を出発。越後支部から推薦していただいた鳥原山へ大朝日岳へ御影森山コースのスタートをきった。

最初の急登も見事なブナ林に歓喜の声を上げるうちに難なくクリアー。金山沢から「天狗の田代」と呼ばれていた鳥原山手前の池塘に咲くミツガシワやキンコウカの花を楽しみ、ハイマツやチシマザサに覆われた小朝日岳山頂に立つ。

七十五歳の支部長を筆頭に、五十代も半ば以上の高齢者?登山隊十二名。この分なら何とか全員十八時頃までには小屋に着けるだろうと、気をひき締めて急坂を熊越へ下る。そして雪溪の脇から流れ落ちるたえようのない水場で勇気百倍。快適な尾根歩きで大朝日小屋に着く。

二十日は早速山頂で雲上の気分を満喫。三六〇度の展望とヒナウスユキソウ、ミヤマリンドウ、チシマギキョウなどの花々を楽しんだ。そして平岩山へ御影森山へ上倉山から急な尾根通しに出発点の朝日鉱泉へ戻った。

遠路朝日鉱泉まで出迎えてくださ

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

った越後支部の方々の案内で、新潟県関川村の今宵の宿へ夕方五時には全員が無事到着。夜遅くまで越後の美酒に舌鼓を打ちながら親交を深めた。越後支部の皆様、本当にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。(藤井法道)

福岡支部

鬼ヶ城で 「盧さん追善の集い」催す

人みな花に 酔うときも
残雪恋し 山に入り……

「坊がつる讃歌」のうた声が流れるなか、元福岡支部事務局長の盧周孝さんをしのぶ集いが、新盆入りを前に、八月十日、下関市郊外の鬼ヶ城山頂(六二〇メートル)で催された。

盧さんは十余年前から洋品店など家業のかたわら、山歩きを始めた。

とくに北九州市郊外の福智山(九〇一メートル)で、多くの岳友と知り合ったのをきっかけに、九州、西中国を中心に、各地の山々を歩き、友情と交流の輪を広げてきた。海外遠征はネパールに向き、四五〇〇余メートルを踏破している。二年間、福岡支部の事務局長を務め、九州各県の岳友との交歓もつづいていた。健脚、「山がめしより好き」という盧さんは、ほかに趣味もたず、仕



盧さんの遺影に焼香し、祈りを捧げる支部員(鬼ヶ城山頂で)

事の都合がつくたびに山に姿をあらわしていた。

しかし、昨年から体調を次第にくずし、ついにすい臓がんにおかされて、わずか四日間入院生活で、さる五月二十二日帰らぬ人となった。享年五十四歳。下関、北九州在住の福岡支部会員や岳友有志が、その功績と人柄をたたえて、しのぶ集いを企画した。

十日は午前十時、登山口にマイカーなどで約四十人が集合。約一時間半かけて急登。鬼ヶ城山頂の広場に、盧さんの登山スタイルの写真を飾り、花束で囲んだ。山岳会員の稲田静代

さん、安達久美子さんが代表して焼香、全員で黙禱のあと、会員の日向祥剛さんらが、盧さんのありし日の活動ぶりにふれながら、お別れの言葉を述べた。さらに、盧さんが愛唱してやまなかった九州を代表する山岳・くじゅうをうたう「坊がつる讃歌」をみんなで合唱。天国にひびけとばかり、夏風によって、山々に調べが流れた。

なお、この企画について、朝日新聞下関版では「山男しのび 山頂で集い 功績と人柄たたえる」の見出しで、八月七日付紙面で報道され、多くの関係者の注目を集めた。この記事には、盧さんの最後の登山となった今年二月の雪のなかの伯耆大山のスナップがそえられていた。

(薄部忠増)

宮崎支部

平家落人伝説を訪ねる 白鳥山・御池の山旅

■弾んだ語り

平成九年八月から遡ること八百二十二年前の文治元年(一一八五年)二月十九日、平家一族は讃岐の「屋島の合戦」に敗れた。さらに同年三月二十四日壇ノ浦の戦いで壊滅的打撃を受けて九州に敗走し、椎葉荘などに隠遁の生活を送ったと語り継がれ

ている。その平家の誉れ高き落人一族・左中将平清経以下三代が七十二年余にわたって生活したという九州山脈脊梁の白鳥山・御池とその周辺の歴史探訪の山旅となった。

八月二日午後、国道二一九、二六五、三八八、三二七号をひた走り、「日向椎葉湖」(命名者吉川英治氏・日本最初のアーチ式ダム)から県道上椎葉湯の前線、さらに峰越林道・日添地区へと続く。

午後五時すぎ、予定よりも早く、「峰越の館(日添公民館)」に到着、東は耳川の本流に向かって幾重にも山脈が落ち込み、北側は自然林に覆われた「石堂屋」、そして登山予定の白鳥山・時雨岳の山の深さに思いが駆け巡る。

まず、白鳥神社(祭神・日本武尊命)に参拝、参道の杉(幹回り約八・三メートル)と榎の太木に歴史の流れを思う。この杉が樹齢八百年とすれば、椎葉村十根川神社の「八村杉」と遜色はなく「向山日添杉」と名づけてみようか。

宿舎となった峰越の館(まさに黄金の御殿)の道路越しに称専坊寺(西本願寺派)がある。創建は天正十七年(一五八九年)というから四百八年の歴史を刻み、人間どもの喜びや悲しみを無言で見つめているようだ。三十年前までは冬になると積雪一

絶滅寸前の希少種ザオウカラマツは生き残れるか

伊藤 敏

南蔵王の馬ノ神岳(一五五メートル)の尾根の一角に天然生のカラマツ属の一種が生えている。この自生地は一九三二年に発見され、わが国固有のカラマツの天然分布の北限とされていたものだが、最近になってカラマツではないといわれ出した。DNA分析の結果、分類上の位置づけはカラマツの変種とされ、「ザオウカラマツ」と命名し、近く発表されるという。

私は、一九九四年七月に現地を訪れ、見る機会を得た。樹形は著しい風衝のため奇形状を呈し、灌木の茂みから頭を出して点生している。樹高は三、四メートルにすぎないが、幹はとぐろを巻く大蛇の胴のように太い。大きいものは樹齢三百五十年を超える。だが、本数はわずか十二本、白骨状の枯死木を交え、風雪に耐えて立つ姿は感動的でした。

六十年前に発見されたときは約三十本、今は十二本にすぎない。

それらは広葉樹に覆われ、自然の推移に任せれば、恐らく二十世紀前半までに消滅するだろう。ザオウカラマツは絶滅に瀕しつつある希少種なのだ。また「氷河期の遺存種」であることも確かだろう。

林野庁林大育種センター・東北育種場では自生地のザオウカラマツから小枝を採り、接ぎ木クローンを養成して遺伝子の保存を図っている。しかし、これにも増して重要なことは自生地での生存を維持すること、現地における保全対策は急を要する。青森宮林局では専門家による現地調査を行い、天然更新を促進するため林床植生の刈り払いなどを実施することとした。一九九五年秋に種子の豊作にめぐりあい、実行された。最近の新聞報道によれば、百本以上の稚樹が育っているのが確認されたという。

ザオウカラマツの自生地での保護をめぐって「自然の推移に任せると」「人手を加えて生存を図る」との両論があった。ザオウカラマツは、貴重な「絶滅危惧種」である。自然推移に任せて絶滅に追いやってはならない。自然保護のために、敢えて自然に手を加えることも必要なのだ。

メートルあったものが、近年では一〇センチ足らずという。ここにも着実に地球温暖化の波は押し寄せている。過疎化のためか伽藍は傾き、奥に数体の素朴な彫刻の木製仏像があるが、制作者やその歴史由来は分からない。

境内には、樹齢八百年のタブノキ(榎の木・クスノキ科)が健在でイワオモダカとシノブが寄生している。夕食後、消防部長(自然保護員)や公民館長(国指定重要無形文化財向山日添神楽の太夫)らが来訪、ヤマシヤクヤクの開花・県外の花嫁・神楽・生活と労働・山にまつわる話は午前零時三十分過ぎまで続く。

■時を忘れた

三日、午前五時五十分起床。それぞれに熟睡と寝不足を味わう。ここは標高八〇〇メートル、朝霧を下界に見る。峰越林道を熊本に向かって高度を上げながら一四九〇メートルの峠に立つ。指呼の間に自然林や白骨をさらけ出す、五勇士・国見岳・烏帽子岳の勇姿を眺める。この峠は九州山脈脊梁の真っ直中にある。熊本県側の林層も見ておきたいと泉村縦木地区を一周する。再び峰越峠を経由して白鳥山・御池登山口に午前十時到着。

気がかりなキレンゲシユウマは、見事に筒状の黄花を咲かせている。

溪沿いに群生地もあり清楚な姿は可憐な少女である。つづいてオタカラコウ、モミジガサ、チャルメラソウと花を追って行くと三十分で水源地に着く。冷水を口に含むと甘さが体の中に染みわたる。見上げるとサワグルミの大木群である。地皮類のキレンゲシユウマなどはシカが食い荒らしている。ここから十分で「平家落人・左中将平清経住居跡」の標柱のある位置に立つ。付近一帯は御池と呼ばれ、一五〇〇メートルの高原湿地帯。第一・第二・第三の池から奥の院まで、大小様々な原生林に覆われ、その中に忽然としてドリーネ(石灰岩柱)があり自然が作り出した庭園に息をのむ。

白鳥山(一六三八・八メートル)山頂には十二時十分立つ。携行食で空腹を満たし、樹齢千年のイチイ(二位。別名オンコ・アララギ)を通り抜け、再び水源地で涼をとり、午後零時四十五分登山口着。

ここで、高千穂山の会のメンバー四人と出合い、昼食を頬張りながら県北の山、宮崎ウエストン祭の開催を巡る行事などの意見交換となり有意義であった。また、白鳥山・御池を訪ねて登山する長崎、福岡、熊本の多くのグループとの出合いを思うと、県内の自然愛好者にも知ってほしい山の一つである。(井野元繁)

東 西 南 北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどし投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

「冠松次郎と黒部溪谷」展 によせて

永田秀樹

「黒部の主」と言われ、日本の近代登山史に大きな足跡を残した冠松次郎(かんむり・まつじろう)一八八三〜一九七〇)。その遺作の写真類および遺稿、愛用のピッケルなどが冠のご子息・郁夫さん(故人)の旧制一高旅行部の同窓生である中村純二前副会長を通して、このほど日本山岳会に寄贈された。

さる五月十四日、冠の孫娘である富樫ヨコさんから中村前副会長に渡された寄贈品は、「山溪記」「平蔵谷を下る」「黒部の秋」などの生原稿、冠が使用した地図、木箱三箱に納められたガラス乾板、ネガ・フィルム類約七百五十点など膨大な量と

なっている。現在、資料委員会で整理しているが、写真類は、山岳写真研究家の杉本誠さんと「岳人」編集部が担当している。

現在、その一部が特別展「冠松次郎と黒部溪谷」と題して、富山県の宇奈月町立歴史民俗資料館(Tel・〇七六五―六五―一〇一〇)で展示されている。八月八日のオープニング・セレモニーには小倉茂輝副会長が出席し、中谷延之町長、滝川修館長の案内のなか、テープカットを行った。その後、同展を監修した魚津岳友会の佐伯邦夫さんの解説で、冠松次郎の業績をしのんだ。

展示された写真は、大正末から昭和初年にかけて撮影された黒部を中心とした約六十点。劔大滝の写真も含まれ、ダム開発される以前の黒部溪谷の様子も興味深かった。愛用のピッケルの柄には「百どの塔」と彫

ってあった。冠は山々を仏塔に例えていたが、「山旅に対する私の態度は不借身命である。そのなかには己を捧げて帰命するやうな熱烈なものがれの思ひさへも籠っている」と、随筆に記している。同展は書簡類も取り揃え、人間・冠松次郎に迫る展示内容となっている。十一月九日まで開催されているので、会員の方もぜひ立ち寄られることをお勧めしたい。

冠松次郎の膨大な写真類は、失われたかつての黒部溪谷、日本の山々の様子を伝える貴重な日本登山界の財産である。傷みやすいゆえに、永



宇奈月町立歴史民俗資料館で冠松次郎の特別展を見る人々

山研・ある時ある時

柴田篤志

八月十日、盆休みと帰省ラッシュで高速道路の大渋滞もあり、予定より大幅に遅れて雨の上高地へ。東京は猛暑でもここでは肌寒い。

雨宿りの一団が退散すると山研に静寂が戻る。宿泊は自然観察のメンバーとそのシンパ?(非会員)と家族のみ。やがてメンバーの議論が酩酊とともに沸騰し始めた。話の中心はO氏。話題は上高地での講演会の内容ではなくて、聴衆に依頼したアンケートの筆記用鉛筆の回収が不手際で未回収があったことらしい。私の感覚では、昨今アンケートに依れば筆記具は無論、抽選でPC程度の賞品がいただける時代に、なんとも浮き世離れた連中だろうと妙に

遠に保存できるような対策が必要であるが、今回の寄贈で日本山岳会はこの文化財を保管し、後世に伝える義務を負ったことになる。冠と同年生れ、尾瀬保全の功績をもつ武田久吉(日本山岳会第六代会長)の写真作品が、横浜開港資料館で完全に保存されているように。冠松次郎の作品群に直接触れた幸運な会員の一人として、そのことを切に思う。

感心した。

このメンバーは手弁当のはずだから、些細でも経費の負担を求めることは酷かもしれないが、飲んでる酒はなかなかの銘酒とお見受けした。安酒にすれば経費の捻出も可能だろうに。

翌朝、このメンバーの一部は車の運転があるといいつつ、迎え酒を始める。一般の社会通念では理解不可能。第三者的に見れば日本山岳会ではやアルパインクラブではなくてアルコルボイズイングクラブだろうか。

かかる人々との相宿は私の単細胞のサーキットに支障を来す懸念もあり、雨の中を岳沢へ。自前の酒がなくなり、十三日山研へ下山。メンバーに代わって山研運営委員のご夫婦と相宿となる。彼らによれば、今年は昨年と比較し宿泊者が減少気味とか。確かに地元との関係などで拘束もあるうが、山研側に問題がないわけでもない。今回は紙数の関係でここでは省略させていただきます。

なお、八月十五日、「ユウバック」により前述のメンバーたちのために、管理人の内田さん経由で鉛筆・ダーズ他の筆記用具を寄進した。全部アソートでもらったものだから遠慮なくご使用いただけることを急ぎつつ。

ヤルフン河源流域踏査隊 97 だより

雁部貞夫

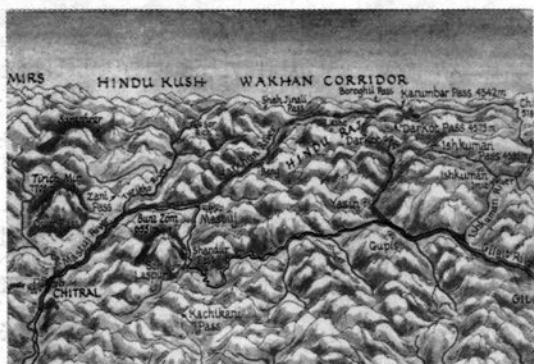
暑中お見舞い申し上げます。

六八年にヒンドウラジのコヨ・ゾムへ入り、三十年目にさらに奥のチアンタール氷河(三三キロ)に入ることに成功しました。六七年のドイツ隊以来のことで、日本では核心部に入ったのは初めてです。

最高に眺めのいいところ四四〇〇メートルにテント設営。しかし毎日雪です。

八月三日

チアンタール氷河で



ルートを示す踏査隊の絵ハガキ

「サリンさんのライフワークを支援する会」その後

山口節子

名誉会員H・C・サリンさんの訃報が「山」六二三号で報じられた。サリンさんは晩年、インドのエベレスト登頂者アルワリアさんの戦争による脊椎損傷をきっかけにインド脊椎障害者センター(IIIC)の設立に尽力され、二代ガンジー首相の協力を得て実現された。JACでも平成四年、有志による「サリンさんのライフワークを支援する会」を発足、百余名の方々のご協力を得て同年十月、UIAA松本会議出席のため来日されたご夫妻に寄付金をお渡しすることができた。

その後、それが歯科機器の購入にあてられ、有効に機能している旨、現在IIICのチェアマンであるアルワリアさんから吉田宏さん宛に手紙をいただいている。遅ればせながらご協力くださった方々にお知らせし、改めてお礼申し上げます。

三角点の顔について

水野公男

三角点についての話をしていると、

必ず三角点標石の顔(標字)についての質問が出てくる。

その大部分が、三角点の顔は大体南側を向いているのですか、という誤問である。登山を愛する大部分の人に、あの山には一等三角点があるとか、三等三角点だったという人が増えてきたが、それ以上三角点の問題について実際調査する人は珍しいようである。

かつて岐阜支部の友人である藤井茂雄氏もそのことに触れられているが、「展望の山旅」(山と溪谷社発行)の著者・野口冬人氏は、同書の中で次のように書かれている。

「地図を使う場合に磁石は欠くことのできないものである。万一山で磁石が使えないとき(磁気の関係で狂うこともある)は三角点の標字を見るとよい。三角点の標字は原則として南に向けて設置されている。(ただしこれは設置時には正確に南向きとなっているが、その後の地殻変動によって著しく狂っていることが多い。はなはだしいものになると南北逆転していることもある)」と。

また、建設省国土地理院企画部の測量管理官で、測量の歴史については造詣の深い志村勉吉氏も、(法令)精密測地網一次基準点測量作業規定の第九条三角点の埋設は、次の各号に示す通り実施するものとする。

三角点標石の顔の向き

(平成9年7月31日現在)

	一等三角点	二等三角点	三等三角点	合 計	%
北 側	0	16	45	61	11.55
北北東側	1	1	2	4	0.76
北 東 側	1	0	0	1	0.19
東北東側	0	0	2	2	0.38
東 側	0	3	4	7	1.33
南 東 側	2	2	6	10	1.89
東南東側	0	0	6	6	1.14
南南東側	15	3	9	27	5.11
南南南東側	1	1	1	3	0.57
南 側	63	72	175	310	58.70
南南西側	13	4	19	36	6.82
南 西 側	6	0	11	17	3.22
西南西側	2	2	6	10	1.89
西 側	1	3	14	18	3.41
西北西側	0	1	1	2	0.38
北 西 側	1	2	0	3	0.57
北北西側	0	2	6	8	1.52
未 確 認	0	0	3	3	0.57
					100%
小 計	106	112	310	528	

(二) 埋設にあたっては、磐石を水平に設置し、柱石は一・二等三角点と刻んだ面を南に向け柱石上面を水平に埋設するところがあるが、現実には様々な方向を向いて埋設されており、確かに標字が南以外向いていることは確かに「なし」とはいえないのですが、三角点標石を埋設する際の規定は定められており、それぞれの測量担当者は、規定に忠実に作業を行ったものと判断してよいものと思われ

ます。

しかしながら標石の埋設には方簾

場合もあります、と述べている。私はこれらの主張を別表一等から三等三角点までの日本全国北から南までの調査結果をまとめ、次のような意見を持つものである。

(一) 三百点の三角点の顔データをまとめた時点と、五百二十八点のデータ集計とを比較し大きなポイントの変化がなかった。

(二) 一等三角点標石の場合地殻変動で七〇センチの長さの四角形で、九〇キロもある石材がぐるりと回るとは考えられない。

(三) 標石の埋定は明治十五年から始められた。明治三十四年の「三角測量方式草案」の「標石の埋定」で初めて正式に決められたが、それ以前

に埋定された多くの三角点が、必ず南を向いていなくても不思議ではないはずである。

したがって、三角点の顔(標字)が全体の五八・七パーセントしか南側を向いていなくても当然ではないだろう。

八月号の巻頭原稿について

村井 葵

会報八月号(六二七号)掲載の坂下直枝会員による「日本の登山とクライミングの差について」は、アルピニズムの根幹を謳う論考なので、敢えて手を加えず掲載させていただきました。

しかし、部分的なところで異論がないわけではありません。同志会の個人プレーと大学のチームプレーの訓練上のメソッドには差があつて当然と思っています。各大学山岳部は体育局(会)に属し、在学中の四年間は山登りのイロハを学ぶ場で、安全かつ効果的な登山を実践しているのです。ですから組織登山の中に埋没し、個としての目覚めに至らず、卒業と同時に山登りを放棄してしまう人が多いことが問題と考えます。大学で培った基礎訓練が世界のナオミ・ウエムラを輩出したことは衆

目の一致するところです。さらに名クライマー坂下直枝が一朝一夕にして生まれ出たはずがないことも心に留めるべきでしょう。

おそらく、短い生涯の中で一生山登りに没頭していても、山の魅力と怖さを知り尽くすことは不可能でしょう。だからこそ限りなく面白い遊びというパラドックスが成り立ちます。常に人知を超えた魔物が棲んでいることを意識しつつ、謙虚に深遠なものへ憧れ続ける好奇心だけは持っていたいと思います。

僕が学生のときに(一九五〇年代)理想としていた一つの例。一九〇七年、ロングスタッフがガルワルのトリスルに刻みこんだトレース。五三二〇メートルのキャンプから、一八〇〇メートルの高度差を一日で登り、その日のうちに二〇〇〇メートル下に帰つた記録。朝五時半に行動を起こし、午後四時に人類初の七〇〇〇メートル峰が陥されました。一時間あたり約一六〇メートルの高差を稼ぐ登攀速度です。古典的ですが、アルプス的登山をヒマラヤで成功させた「山登りの原点」を教える新鮮さを未だに語りかけています。

日本から、世界に伍した優れたクライマーが生まれ、人々や社会に夢と希望と活力を与えてくれたらと強く望みます。

(会報担当理事)

図書紹介



イラスト 野田四郎

目賀田嘉夫・編 『神戸一中遠足部・ 神戸高校山岳部史』

明治二十九年に設立された神戸一の学校創立百周年を記念して編集刊行されたものである。内容は表題通り、中学に遠足部ができた明治四十二年から旧制中学が廃校になる昭和二十三年までの足跡と、昭和二十二年以降、新制高校になってからの山岳部の歴史である。

後に経済学者となった矢内原忠雄らを発起人として創部された一中遠足部の、初めの頃の活躍は学校行事の集団遠足が主なものであったが、部ができて三年目の明治四十五年一月には、雪の六甲山に登り、七月には団体で富士山に登るなど、次第に山岳会としての形、動きができて上がってくる。

それを端的に表わしたものが「群巒」「登攀」という名の山岳部誌を持ったことであろう。とくに「群巒」は戦後まで刊行が続いて二十三号を数え、その後は「鵬山」と名前を変えて現在に至っているという。旧制中学からの山岳部の活動が、明治から平成の現在に至るまで、時代の動きに大きく左右されず連綿と受け継がれ、しかも記録を詳細に残してきた、ということとはなかなかできることではないと思う。そしてその記録を見ると、白馬小蓮華尾根、白馬杓子沢、北葛沢完登と、現役による三つの初登攀の記録をはじめとして、中学生としては大変レベルの高い登山を実行しているのである。

なお、この中学は名誉会員の故・島田巽、水野祥太郎の二人を生み出し、またアングレスで遭難した画家の山川勇一郎もOBである。

(岩瀬皓祐)

一九九七年一月 発行人・大島輝夫 二四〇ページ

梅木秀徳・著

『九重山博物誌』

本書は九重山の登山口で生まれ育った東九州支部長で「坊がつる讃歌」の作者の一人でもある著者が、愛する九重山の思い出をつづった「九重

へのお誘い」である。題名が「博物誌」というのに、地形、地質、動植物など自然科学の分野には言及していないが、これはシリーズのパートⅡとして福岡支部長の松本健夫氏に譲る由である。

五章からなり、第一章では「山と高原の姿」として、九重山群を五つに分けて説明している。

第二章「山と人」では、有史以前より九重に人が住むようになってからの、この山とかかわりをもった人たちの生活史、風物誌、野焼きや信仰、土蜘蛛の民などにふれており、本書の柱になっている。

第三章「伝説の世界」では朝日長者や黒岳の怪物など語り伝えられてきた伝説の世界にふれている。

第四章「登山の歩み」は九重にまつわる登山史を述べながら、自然保護を訴えている。

第五章「文学散歩」は九大文学部出身の著者ならではの章であり、文人、歌人、文学碑や歌碑におよび、九重に関係した文化人の多いことに驚かされる。そして最後に、深田久弥氏の日本百名山で締めくくっている。

私が昨年春、タスマニアのメサセピートの山を歩いて、真っ先に思いついたのは、かつて東九州支部在籍の五年間に、著者らと歩いた九重

の山々であった。それほどよく似ていることをお伝えしておく。

(松田雄二)

一九九七年八月 葦書房発行 二四三ページ 千八百円(税別)

一戸義孝・著

『花の旅・みちのく』

本書は短い花の四季に美しい花を求めて歩き撮影した、山の花の写真とエッセー集である。

山は青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島の大県三十二か所におよび、百四十七の花が紹介されている。

エッセーは紀行と花に分かれ、ひと花ごとのエッセーには、花それぞれの個性豊かな姿や趣、花との出会い、花にまつわる話が、ユーモアを交えてつづられていて、楽しい。

なお、八甲田山について「アルプスなどの花の多さや群生には劣るが、花の種類が多く、勝るとも劣らないのに気づいた。おまけに北方系の植物も多いのだ。そんなことに気づいてから、遠くへ出かける時間がもったいなくなってしまう」と書いている著者は、ふるさとの山にこだわりの撮影を続けている青森在住の写真家でもある。

(三栖寿生)

一九九七年五月 実業之日本社発行 二二九ページ 二千二百円

平成九年度年次晩餐会
ご案内

総務委員会

平成九年度の年次晩餐会を次の要
項で開催します。

日時 十二月六日(土)十八時開宴

会場 新高輪プリンスホテル

国際館バミール

会費 一万五千元

同時開催イベント

「全国支部・とっておきの山」

●年次晩餐会会費徴収方法変更の

お願い

昨年まで実施していた会費の当日
徴収を、今年からは事前振り込みに
変更します。晩餐会出席者数も七百名前後とな
り、当日受け付けでの会費徴収が困
難な状況となってきました。また納
入される金額も高額となり、事故を
未然に防ぐためにもやむをえずとの
判断で、本年度より原則として、出
席希望の会員には、事前に会費の振
り込みをお願いすることになりました。振り込み方法など詳細につきまし
ては年次晩餐会案内の通知に同封し
ます。先の事情をご推察の上、会員
の皆様のご理解、ご協力をお願いし
ます。ル
ーム
日
誌

8月

1日 高所委員会 学生部

2日 三水会

4日 自然保護委員会

5日 スケッチクラブ

6日 名誉会員を囲む会

19日 スケッチクラブ

20日 学生部委員会 図書委員会

25日 アルパインスキークラブ

26日 評議員会

27日 93同期会

28日 アルパインスキークラブ

8月来室者 323名

■会員異動

物故

菅野国広 (三六八六) 9・4・30

松岡清司 (一一一〇七) 9・6・26

各務良幸 (五九九九) 9・7・26

松田彰二 (一一九三二) 9・8・2

原田達也 (六四〇五) 9・8・20

廣島三朗 (六五八八) 9・8・20

中込清次郎 (八一三二) 9・8・20

菊田佳子 (一一四六六) 9・8・20

中澤眞二 (六二二三) 9・8・28

退会 大原照代 (七六七〇) 9・8・31

終身会員 青木伸雄 (六三二〇)

書籍受入報告 (1997年8月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
串田孫一 他(共編)	北岳(日本の名山第17巻)	253pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
串田孫一 他(共編)	丹沢(日本の名山別巻・第1巻)	251pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
鎌澤久也	雲南・カイルス・・・4000キロ	318pp/20cm	平河出版社	1997	出版社寄贈
岩崎元郎	沢登りの本[新装版]	208pp/19cm	白水社	1997	出版社寄贈
柏瀬祐之 他(編)	日本登山大系[新装復刊]第3巻: 谷川岳	276pp/22cm	白水社	1997	出版社寄贈
柏瀬祐之 他(編)	日本登山大系[新装復刊]第8巻: ハケ岳・奥秩父・中央アルプス	306pp/22cm	白水社	1997	出版社寄贈
宇奈月町歴史民俗資料館	冠松次郎と黒部豁谷(平成9年第5回特別展1997. 8/9-11/9)	20pp/27cm	宇奈月町歴史民俗資料館	1997	発行者寄贈
上田茂春(編)	山書好古	358pp/23cm	日本山書の会	1997	発行者寄贈
堀田弘司	中高年のための安全登山	197pp/21cm	家の光協会	1997	出版社寄贈
芦田裕文	巨樹紀行: 最高の瞬間に出会う	175pp/22cm	家の光協会	1997	出版社寄贈
村田信義	道ばたの食べられる山野草(マチュア選書)	184pp/19cm	偕成社	1997	出版社寄贈
JAC自然保護委員会(編)	山の自然学現地講座(第63回): ヨセミテ紀行(1996. 9/6-9/16)	211pp/30cm	JAC自然保護委員会	1997	発行者寄贈
九十九山の会(編)	欧州アルプス: その計画と実践(九十九山の会35周年記念号)	111pp/30cm	九十九山の会	1997	発行者寄贈
梅木秀徳	九重山博物誌	243pp/19cm	葦書房	1997	著者寄贈
ヒーベラー(著) 横川文雄(訳)	冬のアイガー北壁初登攀[新装版]	147pp/19cm	ベースボールマガジン社	1997	出版社寄贈
伊藤健次	分県登山ガイド(第0巻) 北海道の山	111pp/21cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
The Embassy of Japan. A Century of Encounters between Japan & Nepal		207pp/35cm	The Embassy of Japan	1997	外務省寄贈
Alpine Club of Canada. Canadian Alpine Journal (Vol.80, 1997)		127pp/28cm	Alpine Club of Canada	1997	発行者寄贈
American Alpine Club. American Alpine Journal (Vol.39, Iss.71, 1997)		431pp/23cm	American Alpine Club	1997	発行者寄贈

INFORMATION



◆シンポジウム「山で役立つ天気の見方」 科学委員会

山で気象遭難しないことはもとより、安全で快適な山行を楽しむためには、天気図や雲の動き、雪の状態などから、気象の動きを的確に判断し、天気を選ぶことが重要です。

そこで、山の天気の見方についてより理解を深めるために、次のような内容でシンポジウムを開催します。

日時 十一月二十九日(土) 十三時〜十七時

場所 明治大学駿河台校舎・研究棟

JR御茶の水駅下車徒歩三分

内容

1、山の気象と天気図の見方

講師・日本気象協会 奥山 巖氏

2、気象衛星雲画像の見方と利用法

講師・日本気象協会 黒田雄紀氏

・天気図では示されないような、小規模だが激しい現象を伴うことの多い低気圧や前線を、気象衛星の雲画像から判別する方法について

述べる。

3、気象に起因する山岳の危険現象

(谷川岳と富士山の事例から)

講師・専修大付属高 小岩清水氏

雪代雪崩の恐怖! 今の登山知識では助からない雪代雪崩の実態を紹介する。

4、北アルプスの雪

(近年の変動から)

講師・富山県庁砂防課 飯田肇氏

・近年、豪雪・少雪と変動の激しい北アルプスの雪。立山での観測からその素顔を探る。

参加費 千円(資料代を含む)

問合せ 北野忠彦

TEL・FAX 〇四二六―二六―五一八三

〇三〇―〇四―六一一八九

◆山とスキー映画の夕べ

フィルムビデオ委員会

九月号の当欄にてお知らせした表

記の映画会を予定通り開催します。

どうぞお出かけください。

日時 十一月五日(水) 十九時〜

場所 本会ルーム

◆第三回伊吹山播隆祭

東海支部

播隆上人は伊吹山岐阜県側の山中に庵を作り、この地で修行して笠ヶ岳の再興、槍ヶ岳の初登攀を成しとげました。その陰には播隆上人を支えた伊吹山山麓の人たちを忘れてはならないと思います。

播隆上人と麓の人たちのふれあいをと、播隆祭を始めて三回目になりました。日本山岳会会員はもとより、

播隆上人のご子孫、山に関係のない研究者など、日本各地からの参加があいついだのは、播隆上人の徳の現れでしょうか。

今年もまた、伊吹山山麓で播隆祭を催します。皆様のご参加をお待ちしています。

日時 十一月八日(土)〜九日(日)

八日 記念登山 鎗ヶ先(九六三メートル) 約四時間

集合 春日村美束バス停十時

前夜祭 国見岳スキー場ロッジ

九日 シンポジウム(パネリスト予定者)

穂刈貞夫氏(槍ヶ岳山荘主人)

黒野こうき氏(播隆上人研究者)

尾上 昇氏(東海支部長)

*昼食(伊吹薬草膳)、薬草風呂

午後、城台山一心寺(播隆上人建立) 参拝

問合せ 播隆祭事務局・稲葉省吾

岐阜県安八郡神戸町落合一一七

TEL・〇五八四―二七―七二四七

◆原 真・松沢節夫油彩画二人展

思い入れの山を描く――

カラコルム、ネパールヒマラヤ、

アルプスや日本の雪山など三十点を

出展します。

日時 十月二十日(月)〜二十六日(日)

十一時〜十八時(最終日は十六時まで)

場所 月光荘画室2(中央区銀座八

七―一八 美陶ビル1F)

◆編集後記◆

アルパイン・クラブとしてのあるべき姿を慮って、坂下直枝、江本嘉伸、柳沢昭夫各会員の玉稿を三号にわたって巻頭に掲載させていただきました。時の流れに即したJACの飛躍への足がかりになれば幸いです。しかしまた、山の世界は百人百様、その広さと深みには果てしがなく、純粋な登攀、研究、保全、思索、創作観測等々。この山を極め尽くそうとする好奇心こそが活力の源であると感じています。それはとても太刀打ちできない山という巨大ないのちへの融合を試みるひたむきで尊い希求でもありましよう。

若者の、また全国各支部の、そして女性会員の熱い寄稿をお持ちしています。

(村井 葵)

日本山岳会報 山 629号

1997年(平成9年)10月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社